

ハイデガー・フォーラム第16回大会

応募要旨2

(統一テーマ：文学)

「可能性」と文学の問題

ハイデガーの思索（のとりわけその前期）において「可能性」が中心的な意味を担っていることは周知の通りであるが、同時にこの概念、あるいはむしろ実存範疇が、文学の存在にとっても根源的であることは言うまでもない。それは小説や戯曲といった「虚構」の存立条件であることはもちろん、詩歌においても常に核心的な問題として潜んでいるはずである。ところが、やはりハイデガー自身によっても強調されているように、この可能性概念には極めて解き難い多義性がまわりついており、それを端的に示すのが例えばアリストレスにおけるねじれ、すなわち『形而上学』においては現実性を可能性の上位に置いてにもかかわらず、『詩学』では、現実についてしか語れない歴史に対して可能的なものについても語りうる詩(悲劇)の方に優位を認めている、という事実である。したがって、「可能性」と文学の問題」は、単に前者の概念によって後者の現象を記述・分析するというだけでなく、同時に、様々な文学の存在様態を解釈することを通じて「可能性」の側の厚みある網目を解きほぐす、という方向の作業をも含むことが可能かつ必要であろう。

応募者はこれまでもこの可能性/dynamis という主題を、大まかにいって「様相」的側面と「能力」的側面が人間存在の超越論性を挟んで錯綜する問題として研究してきたが、これを踏まえた上で今回は、「詩人を登場人物とする虚構は可能か？」という観点を提示して、「可能性」を巡る思考を深める一助としてみたい。というのも本来、詩歌とは言葉の「現存在」そのものであり（リルケ『オルフェウスへのソネット』I-3参照）、それは常に同時に当の言葉を発した者の（現）実存（在）を指し示さずにはいないはずだからである。つまり、（特別な能力を帯びた）詩人を（様相的諸可能性によって構築される）フィクションの内部に閉じ込めておくことは限りなく難しい。この困難は事實的・技術的なそれではなく、存在論的・構造的な物である（ただしここで問題にしているのは、「彼女は詩人であった」といった単なる再表象による通俗的な虚構ではなく、当人の資質がその作品そのものによって現示される、歌物語のような場合である）。

このことには、例えば『マルテの手記』や『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』、あるいは『ボヴァリー夫人』といった虚構の分析を傍証とすることができる。というのも、それらの内部に現れる詩はごく当然のように全体の書き手であるリルケやゲーテの作品として扱われてきたり、マイナー詩人の暗黙の引用であったりするのである。しかし当然、問題含みの場合も多くあり、例えば登場人物たちが頻繁に歌を詠む『源氏物語』などをどう考えるか、といった問いがある。

これらが紫式部の作とされることは少ない一方で、虚構人物の歌として勅撰集に取られるようなこともない。ここにはやはり、「作者」や「現実」「虚構」といったものが織りなす構造は歴史的・社会的な諸条件によって変容するという問題が潜んでおり、これは広範な具体的個別研究を必要とするテーマであろうが、本発表では特に一つの問いを提起しておきたい。

それはすなわち、「詩人を登場人物とする虚構」が成立することは存在論的・形而上学的に極めて困難であるにもかかわらず、(例えば「大きな物語」の消失などと特徴付けられる)この現代の歴史的状況が、そうした作品を要請せざるをえないのではないか、という疑問である。これは、「単独性」や「瞬間」といった実存範疇を伴う「本来性」概念の可能性を活かすために必要である一方で、後期ハイデガーの存在史(すなわち一種の大きな物語)に対するデリダらの批判にも関わる論点であろうと思われる。